二月革命とプルードン

――自由と権威の対抗をめぐって

佐藤清

I　所有論における自由と権威

フランス社会主義思想の文脈において、衝撃的な発言（「アナルシー」「所有は盗みである」）をもって登場したプルードンは、一八四〇年、主著『所有とは何か』（以下『所有』と略記）において、哲学的な次元にとどまってはいたのだが、すでに、近代的アナーキズムの特徴であるフランス革命来の標語、個人の自由というものを、至高最上のおかすべからざる聖なる価値として確定していた。と同時に、自由の対立概念である権威というものを、自由の対極にたついむべき虚構としてしりぞけていた。『所有』におけるプルードンの法理論をいま問わないで、かれの哲学・思想を問題にするならば、それは、自由にたいする熱愛と権威にたいする憎悪とを、ともに現今の所有問題＝制度とのかかわりで表明したものであるということができる。すなわち、かれは、侵害の能力としての所有、不労収得権としての現今のネガティヴな所有も、このネガティヴな所有の裏がえしである強権的・圧制的な権威体制としての共有も、ともに権威としてたちあらわれざるをえないということ、そしてそのことが、人間にとっての至高最上の価値である自由＝不羈な人格にたいする重大な侵害になるのだと表明したのであった。

こうして、プルードンは、ネガティヴな所有と強権的な共有との両面批判を行いながら、みずからの理想社会たる第三の社会形態を求め、それを自由とアナルシーの社会であると結論したのである。『所有』における自由と権威をめぐる議論の核心は以上のようなものであった。しかし、自由と権威の問題は、『所有』の段階ではまだ哲学の次元をこえていない。かれの体系において、この問題が鮮明に、そしていっそうの緊張感をもって述べられるようになるのは、やはり、みずから思索から行動の生活にはいると語りだす一八四六年の『経済的諸矛盾の体系』（以下『諸矛盾』と略記）以後のことである。四六年の『諸矛盾』は、プルードンにおける所有論の理論的な一応の完成であると同時に(1)、かれを行動の生活に進ませた転換点をなしている。プルードンにとって行動の生活とはなにを意味するのか。みずからの思想を現実に移すこと、一八四〇年来のみずからの経済科学(2)を現実社会にあてはめること、これがかれのいう行動の生活であり社会革命の実践である。しかもそれはけっして政治革命であってはならず、あくまでも経済革命でなければならない。政治権力の交替という意味での革命は一八世紀で終ったのである。一九世紀は経済革命の時代であり、それは経済科学によってあらわされる社会の実証的な研究のなかにのみ存在する。政治革命とは人間疎外の表現以外のものでなく、それは宗教とかわらないのである。こうしてかれは、みずから主宰する『人民』紙の創刊号に「革命、われわれが諸君に命名する革命、それは経済科学である」(3)と書くのである。

一八四八年の二月革命の直後、プルードンは『人民の代表者』紙に「所有と共有とのあいだに、わたしはひとつの世界をうちたてるであろう」(4)と書く。この世界が『所有』で表明された自由とアナルシーの社会なのであるが、二月革命期のかれはそれにいたる具体的な道筋を提起してゆく。『所有』で告発したネガティヴな所有にたいする否定はいぜんかわらないが、個体的占有という言葉で示したポジティヴな所有(5)にたいする擁護と、強権的・圧制的な共有にたいする原理的非難はいっそうつよまってゆく。たとえば、二月革命の成果である普通選挙法制定の実施にもとづいて行われた革命直後の選挙（四月二三日）で、社会主義派が大敗したのにふれて、選挙は所有と共有との選択であったとし「共産主義の否定、これが一八四八年選挙の真の意味である。われわれはけっして労働の共有、妻の共有、子供の共有を望まない。ラマルティーヌの二六万票がこれを証明している」(6)と述べている。この言葉は、人間の聖なる自由にたいして、共有＝共産主義がもつ不条理な画一性と風俗主義とにたいするプルードンの警告の言葉なのである。つまり、所有の裏がえしである共有とは、権力の正当化にほかならず、それは国家的規模での所有の再構にほかならないからである。したがって、どこまでも人間の自由を至高最上ならしめるためには、個人の自由を守る砦＝ポジティヴな所有を普遍化しなければならず、そのためには、現実社会の不平等と独占とを排除することが緊急の課題でなくてはならない。

「生産物は生産物と交換される」(7)。これが『所有』以来のプルードンの経済科学の原則である。いっさいの交換は生産物が等価であることを前提としている。したがって、交換から生ずる利益は本来不条理であり不正なものである。経済のこの原初的な原則を守るためには、「生産者を詐欺師に全商業を泥棒の巣窟」(8)のままに放置している流通の無政府にピリオドをうたなくてはならない。かれの「交換銀行」（のちに「人民銀行」と名称変更）設立のプランは、流通の組織化に着目したプルードンの

●ネガティヴな所有と強権的な共有との両面批判

●所有の裏がえしである共有とは国家的規模での所有の再構である

●自由とアナルシーの社会

二月革命期における経済革命の試みである(9)。

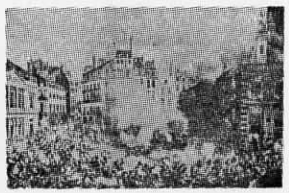
「人民銀行」とは、すべて労働にたずさわるものが、自分の労働の成果を、排他的な経済的暴君である貨幣の仲介を経ないで、自由に直接に間断なく、その生産に要した労働量でもってはかられ償われる小社会のことである。ここにおいては、もはや搾取はありえず、全生産者に自由と安全と福祉が保障される。つまり、この社会では、ネガティヴな所有はそのネガティヴな性格を剝奪され、すべてポジティヴな所有に性格を変ずるのである。

「所有を廃止する作業の始まる日、私権が交換の権利に置きかえられる日、この日こそ、全世界にたいする、ブルジョアジーとプロレタリアートにたいする挨拶の日なのだ」(10)とかれはいう。ネガティヴな所有と強権的な共有との同時否定によってゆきついたプルードンの理想社会とは、このように流通を組織化することによって、相互性＝双務性にもとづく直接交換の社会、すなわち各人の創意と自発性が最大限に保障される社会、逆からいえば、各人の自由と自発性を圧し殺す権威がもっとも揚棄される社会なのである。この社会において、自由と所有はともに醇化され、自由は「他人を妨げないですべてを為す権利」と定義され、所有は「自己の所得、労働と勤勉の成果を自由に処分する権利」と定義されるのである。ここにおいて、自由と所有はコロラリーである。「所有とは、この自由から合法的に生じた自由である」(11)とプルードンは結ぶ。

Ⅱ　国家・革命論における自由と権威
――ルイ・ブランとの比較から――

プルードンの理想社会とは、このように、自由が最大限に開花する社会、権威が最小限に制限される社会である。ところで、自由と権威にたいするプルードンの問題のたてかた、とらえかたは、遭遇した二月革命を契機に、かれ自身、国家と革命の領域に直接踏みこんだときから、いっそうの緊迫感をもってわれわれにせまってくる。

二月革命は、直接的には、労働者の解放をねらったプロレタリア革命の性格をおびるものであった。しかし、そこでのプロレタリア範疇とは、失うべきなにものもたないという意味での常識とは質を異にしている。終生「人民の子」たることに誇りを抱いていたプルードンが革命のなかで擁護した階級、かれ自身プロレタリアートという名で呼んでいた階級とは、一定の生産手段と技術を備え、そして協業体制のもとでみずから商品生産に従事する小工場主（ジュニフ・ムーリエ／ノートル・クリエ）（労働親方）や職人（ジュニヨン）を意味している。二月革命の舞台に登場したパリの革命的プロレタリアートとは、じつのところ、こうした所有意識の旺盛な小生産者＝労働者なのである。この点の確認は、プルードン理解とともに、二月革命を理解するうえでの要点である。産業革命の進展のなかでいまや沈澱しはじめていた小所有者の、資本主義の波にいまや圧し潰されようとしていたかれら小生産者＝労働者の立場を守るために、プ


テュイルリー宮に迫る民衆（二月革命）

●相互性＝双務性にもとづく直接交換の社会

ルードンは社会革命の実践に踏みこんでゆくのである。二月革命とは、このように、工業化と都市化のなかで、苛酷な運命をたどりはじめていた勤労生産者大衆と、かれらの救済を叫んだ社会主義者との反乱なのであり、ブルジョアジーの知的分子に指導された一八三〇年の七月革命とはまったく異質の革命であった。

万人共感の革命、人民の共和政樹立という期待をもって成立した革命臨時政府――労働者代表としてルイ・ブランとアルベールが入閣する――は、矢つぎばやに、三色旗を国旗に定め、一〇時間労働法を制定し、普通選挙法を制定する。そして最後に、世界に先がけて労働権の容認を布告する。このなかで、社会革命の実施として、もっとも重要な意味をもったのが〈労働の権利〉をどのように保障するかということであった。プルードンの論敵ルイ・ブランが革命政府の一閣僚として積極的にかかげた〈労働の組織〉という構想は、この労働の権利を保障するための処方箋である。労働によって生活する権利が秩序だてられ保障されること、労働によって生活することの確実性が、社会制度そのものから由来するような新社会の構築、これがルイ・ブランの労働の組織にこめられた企図である。一八四七年七月、主著『労働の組織』（初版一八三九年）の序文にかれはつぎのように記している。「労働の組織、この言葉は今日、フランスの隅から隅まで響きわたっている」(12)。

ところで、プルードンが現今の社会悪の根源をネガティヴな所有にみいだしていたのにたいし、ルイ・ブランはそれを自由競争にみいだす。フィジオクラートによって先唱され、スミスによって体系づけられ、セイによって導入された自由放任思想がフランスで展開しているもの、それはルイ・ブランのみるところ、頽廃と困窮の促進にほかならない。すなわち、競争は人民にとっては「絶滅の制度」として作用し、ブルジョアジーにとっては「衰頽と壊滅の不断の原因」(13)として作用している。前者、競争が人民にとって絶滅の制度としてあらわれる過程とは、具体的には、ブルジョアジーの提供する賃金＝仕事に群がるプロレタリアートの労働力競売状態をさす。労働市場は、ここではまったく一方的な買手市場であり、賃金の「値下げの坂はとことんまで下るであろう」(14)。これが人民にとっての自由競争の内実である。ブルジョアジーにとってはどうか。レッセフェール・レッセパッセはブルジョアジーの標語であり、かれらの社会制覇の武器であった。しかるに、この武器がいまやブルジョアジー自身にむけられているのである。「ブルジョアジーは、暴政原理たる無制限の競争のうえに自己の支配をうちたてた。ところで！　われわれは今日、ブルジョアジーがこの無制限の競争によって滅ぶのをみる」(15)。なぜか。スミスやセイが自由競争にみた利益とは、競争による生物物の〈安価（ボン・マルシェ）〉であった。しかし安価とは、消費者の立場からみた一時的な利益にすぎず、それは生産者に破滅的な無政府の種子を蒔くことによってはじめて消費者を利するものである。このことは裏からみれば、資本家間における生存競争を意味しており、強者

●自由競争に社会悪の根源をみる

●ルイ・ブラン「労働の組織」にこめられた企図

による弱者の収奪、整理、淘汰を結果せずにはおかない。安価とはこうして、ルイ・ブランによれば、「富める生産者が富裕ならざる生産者をうちのめす棍棒」であり、「大胆な投機家が勤勉な人間を陥いれる奸策」であり、「高価な機械を入手しえぬ製造業者にたいする死刑判決」(16)の機能を演じているのである。

社会悪の根源をこのように自由競争にみいだしたルイ・ブランは、これにたいして、現今の競争原理を結社(組合)原理におきかえることによって、労働権の保障された社会を構築しようとする。かれの「社会工場」普遍化の試みがそれである。結社原理にもとづくところの社会工場をフランス全土に設立することによって、既存の私的企業の組みかえを、あるいは私的企業の存在理由の消去をはかること、これが社会工場にこめられたルイ・ブランの企図であった。社会工場とはなにか。それは、ルイ・ブランの第一理念たる平等の実現される小社会をさす。この平等は「その能力に応じて生産し、その必要に応じて消費する」(17)ときにはじめて真の姿をもってあらわれる。つまり、社会工場で働らく労働者は、労働と報酬を共通にするのである。私的所有にもとづく競争社会を、共同所有にもとづく結社社会に組みかえることによって、かれは社会的な連帯をはかろうとしたのである。

ルイ・ブランは、この革命のイニシアティヴをだれに求めようとするのか。〈ブルードン-ルイ・ブラン問題〉の核心はここにある。ルイ・ブランは、国家を革命達成のための道具・手段として積極的に利用することを説く。「国家のあらゆる力を応用しなくてはならない」。もし権力を道具として利用しないならば、われわれは反対にそれに障害物としてでくわすことになるからである。かれは国家をつぎのように定義する。「もしわれわれが、われわれの概念において国家を定義しなければならないとしたならば、われわれは《国家は貧民の銀行家》であると答えるであろう」(18)。ここにルイ・ブランの描く国家観は明瞭である。すなわち、それは民主的な国家であり、「社会工場を建設し、それに法律を与え、すべてのものの名と利益において、社会工場の運行を監督する」(19)役割しかもたない国家、かれの言葉でいえば〈下僕国家〉なのである。このような国家は、いかなる意味においても専横と専制への道をひらくことはないとかれは考える。「ゆえに、われわれが権威の原則の復活を要求するのは、自由の名においてであり、自由のためにである。……未来の自由は真理であらねばならないがゆえに、われわれは権力の観念を主張するのだ」(20)。かれの国家は、このように、結社原理にもとづく理想社会実現のための率先垂範と管理後見の役を担わされた国家なのである。したがって、社会革命の達成とともに国家は消滅する。かれはつぎのように結んでいる。「いつの日にか、もしもわれわれの心のもっとも豊かな希望が欺かれないならば、もはや強固な積極的な政府を必要としない日が到来するであろう。なぜなら、もはや社会には劣等で弱小な階級がいなくな

●《国家は貧民の銀行家》である(ルイ・ブラン)

●私的所有にもとづく競争社会を共同所有にもとづく結社社会に組みかえる

るだろうからである。そのときまでは、後見的権威の設定は欠くべからざるものである」(21)。

一方、プルードンは、労働の組織にしろ、流通の組織にしろ、労働者のための社会革命は労働者自身の手で為されなくてはならないという。つまり、ルイ・ブランが〈上からの〉革命を主張するのにたいして、プルードンは〈下からの〉革命を主張する。かれは一八四八年四月につぎのように書いている。「われわれはつねに、プロレタリアートの解放は政府の助力なしで為さるべきであると考えてきた」(22)。六月になるとその調子はさらに強まる。「ド・ジラルダン氏は《上からの》革命家である。……かれは革命家のなかのもっとも悪い人物である。《上からの》革命、それはすべての事柄にたいする権力の干渉であり、国家の絶対的自発性であり、メーム＝アリやルイ・ブランの純粋政府主義である。《上からの》革命は、集合的活動の否定であり、人民的自発性の否定である。……ド・ジラルダン氏の第一理念は《人民のためにすべてを》しかし《人民によってはなにもされず》である。……われわれの命題は《すべてを人民のために》《すべてを人民によって》もっぱら《人民によって》である。……ド・ジラルダン氏は人間の力には信頼をよせる。しかし人民の力にはよせないのである。このために、かれは《上からの》革命をのぞみ《下からの》革命によって為そうとし大衆に依拠して為そうとはしないのだ」(23)。プルードンが〈上からの〉革命をなぜ拒否するかは右の引用からも明らかであるが、それが政府＝権威体制をとらざるをえないということからきている。プルードンにとって、政府とは、つねに人間の自由をおかす虚構なのである。「われわれは、人間による人間の搾取以上に人間による人間の統治をのぞまない」(24)とかれはいう。

プルードンの自由と権威、アナルシーと政府、そして革命と国家という問題をそれぞれに検討してゆくと、ルイ・ブランはゲランも述べているように、プルードンにとっての〈いやな奴〉的人物として登場している(25)。プルードンが直接、ルイ・ブランの名をあげて論難するようになるのは、一八四六年の『諸矛盾』からである。そこではつぎの二点から批判を展開している。第一は、ルイ・ブランが競争を社会悪の根源と規定したこと。これは、ルイ・ブランが、競争がもつ社会推進の基本的性格に無知であることからくるとかれはいう。「競争は実際、集合的活動の表現である」(26)「競争は集合的活動の方法、社会的自発性の表現、民主主義と平等の象徴、もっともエネルギッシュな価値構成の道具、結社の支援である」(27)。プルードンにとって、競争は社会的前進の推進力であるとともに、個人の自由な活動の保障であり、経済的ダイナミズムの契機なのである。第二は、ルイ・ブランが競争の修正あるいは廃止という社会革命の手段を政府＝権威の干渉に求めたことである。それは、〈上からの〉革命にほかならず、「もっとも恣意的で、もっとも暴力的な抑圧、権力によって布告され、力によって実行

●「人間による人間の搾取以上に人間による人間の統治をのぞまない」(プルードン)

プルードンと二人の娘(クールベ画)

される抑圧」[28]なのである。「ルイ・ブランは、私が民主的社会主義、人民による革命を代表するように、政府的社会主義、権力による革命を代表する。二人のあいだには越えられない隔りが存在する。……私が表明する社会主義、それはルイ・ブランが表明する社会主義の反対側にたっている。この対立は宿命的である」[29]。

なにゆえに、二人の対立は宿命的なのか。「人間は自由である。ここに私の第一命題がある。自由、それは思想である。私はデカルトの《我おもうゆえに我あり》を翻訳しているだけなのだ。《我自由なりゆえに我あり》。すべての命題はここから幾何学的な証明と厳格さをもって生じてくる」[30]。ルイ・ブランはプルードンの批判にこたえてつぎのように書く。「われわれは福音書の深遠なる言葉《汝らの第一の者他のすべての者の下僕たれ》をモットーに、後見的で寛大で犠牲的な権力を好む。そして権力の堕落、すなわち圧制的で人民に犠牲を強いる改竄を憎む。われわれは《支配者国家》という概念のなかに、傲慢、侵害、略奪のあることに反抗するのだ。反対に《下僕国家》という概念のなかに、感動、繁栄、高貴のあることに拍手を送るのだ」[31]。ルイ・ブランはこうして、国家改造への期待と確信をこめて、論文のタイトルを「国家それは諸君である！」としたのである。プルードンはこれにつぎのように反論する。「国家、権力、それはルイ・ブランの血であり生命である」。だからこそ、ルイ・ブランは言葉をかえれば事物の本質が変わるかのごとくに思い違いをして、〈支配者国家〉のかわりに〈下僕国家〉といったりするのである。かれのやっていることは名称の変更にすぎない。プルードンにとっては、後見的で寛大で犠牲的な国家を想定すること自体、幻想でありユートピアなのである。なぜなら、「《下僕》と《支配者》が国家について語られるとき、それは同義語なのである。……いわゆる《支配者国家》、公的力の簒奪と、いわゆる《下僕国家》、公的力の委任、これはつねに力の疎外であり、つねに市民の内在的で譲渡も移譲もしえぬ権威にとってかわる外的で恣意的な権威である」[32]。こうして、プルードンはルイ・ブランの〈上からの〉革命方式を糾弾するとともに、その意味をこめて論文のタイトルを「革命への抵抗」としたのである。プルードンのみるところ、ルイ・ブランの思想は結局、自由の名のもとに語られる、独裁と圧制への合理化論でしかないのである。

「国家、それは人民の合憲的な唖である」[33]。すなわち、国家＝政府とは合法的な権威体制であることによって、容易に人民の自発性を封じこむのである。それゆえ、人民の主体制を欠如させたままでの社会革命、「国家のイニシアティヴによる国家の廃止は自殺にほかならない」[34]のである。「権威――自由。ここに政治の二つの極がある。これらの対照的な、正反対の、相容れない対立は、われわれに第三の言葉はありえない、それは存在しないという確実な保証をもたらす」[35]。ところで、「今日、権力の構成理念、それは自由である。自由！世界の魂、創造者の原理、保守派の原理、革新派の原理、諸国民の生命、普遍的力、絶対理念、自由のまえには他の理念は火花のごとく定まるところなく飛び散る。自由なくば神それ自体は悪であり、所有は盗みである！」[36]「自由、つねに自由、自由以外になにもなし。これがわれわれの旗、われわれの標語、われわれの綱領である」[37]。

●ルイ・ブランは権力による革命を代表する

●〈上からの〉革命方法を糾弾

自由と権威というアナーキズムの対立概念が、プルードンのなかでどのように展開されていたかについては、以上の論述からほぼ明らかになったと思う。プルードンはすでに、一八四〇年の『所有』において、みずからをアナルシストであると表明している。アナルシストたるかれが、現実の社会を破壊し、そのうえに構築しようとした社会、それが、所有でも共有でもない自由とアナルシーの社会なのである。しかしながら、その理想社会達成のためには、革命手段としてどのような手続が要求されるのか。ここに、自由と権威をうきぼりにするところのプルードンの革命理念が収斂するのである。権力の再構を断念させ、外在的ないっさいの権威を消滅させて、もっぱら、自発性にもとづく人民のロジックを手がかりに社会革命を追求すること、これが、かれの求めた革命の理念であり、自由の王国であった。一八四八年の二月革命の狂乱のなかで、ひとり、この革命を「理念なしに行われた革命」であると自分の手帳に綴ったプルードンの真意は、この革命が、一七八九年の大革命の繰り返しである政治革命におわりかねない危険性をみてとっての警告なのである。ルイ・ブランに代表される政府主義的な社会革命の道が進行するなかで、労働者の自発性に期待したプルードンは、この〈上からの〉革命に強い疑問を投げかけたのである。「二月二四日の革命は正当である。しかし法にかなっていない」[38]あるいは「臨時政府は革命を理解してはいない」[39]というかれの言葉は、いずれも同一線上のものである。プルードンにおいて、自由と権威という対立概念は、まことに、かれ自身語ったように、第三の言葉はありえないほど対極にたっているのである。

（さとう　きよし・中央大学助教授・労働運動史）

●もっぱら自発性にもとづく人民のロジックを手がかりに社会革命を追求する

（1）『諸矛盾』をプルードンの所有論の理論的な完成というのはつぎのような意味からである。すなわち、プルードンの所有論の核心は、「所有とは盗みである」という命題と「所有とは自由である」という命題の二つがコロラリーとして成り立つものでなければならない。この意味で『諸矛盾』は、所有と自由がかれの体系のなかで論理的必然性をもって述べられた最初の著作であるからである。プルードン自身『一革命家の告白』（一八四九年）のなかでつぎのように語っている。「『諸矛盾』で、私は最初の定義を想い起し確認したあとで、それとはまったく反対の、しかし別の次元の考察にもとづいて最初の立論を破ることもまたそれによって破られることも

ありえない定義、所有、それは自由である、をつけ加えた。所有、それは盗みである。所有、それは自由である。これら二つの命題は『諧矛盾』において、ともに等しく論証され相並んで有効性を保っている」。P.-J. Proudhon, *Les confessious d'un révolutionnaire*,[Marcel Rivière, p. 179.

(2) プルードンは所有を所与のものとして取扱うスミスやセイなどの経済学と区別して、集合的労働概念にもとづいて所有の不可能性を論証してゆく自分の経済学を経済科学 (*science économique*) さらに流通の組織化によって自由と平等の社会を建設してゆこうとする自分の科学を経済科学あるいは社会科学 (*science social*) と呼んでいる。P.-J. Proudhon, *De la création de l'ordre dans l'humanité*, Lacroix, p. 247. *Système des contradictions économiques*, t. I, Marcel Rivière, pp. 65–89. *Le peuple*, (octobre) 1847, *Le Représentant du Peuple*, 9, 11 et 31 mai 1848, *Le Peuple*, 2 septembre 1848. (以下本稿で使用したプルードンの新聞はいずれもフランス国立図書館所蔵のものをマイクロフィルム化したものによった)。

(3) *Le Peuple*, (octobre ?) 1847. 創刊号には日付はないが友人ベルグマン宛の手紙から推測して一八四七年一〇月初旬であろう。

(4) Organisation du crédit et de la circulation, et solution du problème social, *Le Représentant du peuple*, 12 avril 1848.

(5) ポジティヴな所有を示す「個体的占有」(*possession individuelle*) という言葉は『所有』以後ほとんど用いられず、ポジティヴな所有のばあいにもネガティヴな所有のばあいにも「所有」(*propriété*) を用いている。プルードンの用語の非厳密性と不統一性は「所有」に限らず、たとえば「アナルシー」「資本」「平等」にもみられる。かれが一貫してポジティヴな意味をもたせて用いた言葉は「労働」「生産」「正義」「自由」である。

(6) Mystification du suffrage universel, *Le Représentant du peuple*, 30 avril 1848.

(7) Programme révolutionnaire, *Le Représentant du peuple*, 31 mai 1848.

(8) Démonstration du socialisme, *Le Peuple*, 19 mars 1849.

(9) プルードンが体系的な「交換銀行」(*Banque d'Échange*) のプランを新聞に発表するのは一八四八年四月一一日からである。*Le Représentant du Peuple*, 11 avril 1848. また「人民銀行」(*Banque du Peuple*) と名称を変更するのは同年一一月二五日からである。*Le Peuple*, 25 novembre 1848. 「人民銀行」は一八四九年二月一〇日開設され、五フランの株券も発行し、三月一九日には加入者数一〇三〇七名 (雇主一六一三、労働者八六九四) を数えたが、大統領ルイ・ナポレオンにたいする筆禍事件のためにプルードンが三年の有罪判決を受けたことによって実際には実験に移されずにおわってしまう。

(10) Résumé de la question sociale (1er article), *Le Représentant du Peuple*, 9 mai 1848.

(11) Programme révolutionnaire, *Re Représentant du Peuple*, 31 mai et 1er juin 1848.

(12) L. Blanc, *Organisation du travail*, Paris, 1850, p. 2.

(13) *Ibid.*, p. 24. (14) *Ibid.*, p. 26.

(15) *Ibid.*, p. 23. (16) *Ibid.*, p. 57.

(17) *Ibid.*, pp. 72, 76. (18) *Ibid.*, p. 13.

(19) *Ibid.*, p. 14. (20) *Ibid.*, p. 18.

(21) *Ibid.*, p. 18.

(22) La situation, *Le Représentant du Peuple*, 20 avril 1848. 『諧矛盾』でもつぎのように書いている。「労働の組織を権力と資本に訴えるものはみな嘘つきである」(*Contr.* II, p. 310.)。

(23) *Le Représentant du Peuple*, 8 juin 1848.

(24) Manifeste électoral du peuple, *Le Peuple*, 8–16 novembre 1848. Qu'est-ce que le Gouvernement ? Qu'est-ce que Dieu ? *La Voix du Peuple*, 5 novembre 1849.

(25) *L'actualité de Proudhon*, Bruxelles, 1967, p. 67.

(26) *Système des contradictions économiques*, t. I, p. 237.

(27) *Ibid.*, p. 247.

(28) Démonstration du socialisme, théorique et pratique, *Le Peuple*, 12 mars 1849.

(29) *Les confessions d'un révolutionnaire*, p. 200.

(30) Dieu c'est le mal !, *Le Peuple*, 7 mai 1849.

(31) Homme du peuple, l'État c'est vous !, réponse au citoyen Proudhon, *Le Nouveau Monde*, 15 novembre 1849.

(32) Résistance à la révolution, Louis Blanc et Pierre Leroux, *La Voix du Peuple*, 3 décembre 1849.

(33) A propos de Louis Blanc (6e article), *La Voix du Peuple*, 11 janvier 1850.

(34) A propos de Louis Blanc (5e article), *La Voix du Peuple*, 9 janvier 1850.

(35) *Du principe fédératif*, Marcel Rivière, p. 280. 邦訳『プルードン』Ⅲ、三一書房、三四〇ページ。

(36) Au président de la République, la socialisme reconnaissant, *La Voix du Peuple*, 2 février 1850.

(37) Protestation, *La Voix du Peuple*, 17 avril 1850.

(38) *Le Représentant du Peuple*, 1er avril 1848.

(39) *Le Représentant du Peuple*, 2 avril 1848.